

感性、ハーモニー、あじわい

奨励	森喜 啓一〔もりき・けいいち〕
奨励者紹介	同志社大学神学研究科生

互いに重荷を担いなさい。そのようにしてこそ、キリストの律法を全うすることになるのです。実際には何者でもないのに、自分をひとかどの者だと思ふ人があるなら、その人は自分自身を欺いています。各自で、自分の行いを吟味してみなさい。そうすれば、自分にに対してだけは誇れるとしても、他人に対しては誇ることができないでしょう。めいめいが、自分の重荷を担うべきです。

(ガラテヤの信徒への手紙 6章2―5節)

互いの重荷を担うこと

「互いに重荷を担いなさい。そのようにしてこそ、キリストの律法を全うすることになるのです」。これは、先ほどお読みいただきました、ガラテヤの信徒への手紙6章2節の部分です。ここでパウロが言っているのは、互いに他人の重荷をも担い合うことが、自分自身の重荷を担うことであり、そのように互いに支え合うような関係がキリスト者として、教会として大切だということです。そして、互いに支え合う関係を作ろうとするときは、まず自分の欠点や弱さに気がついて、自分自身が担うべき責任をよくわきまえるようにしないと、本当に互いに助け合う関係にはなれないということです。

これは一体何を意味しているのでしょうか。自分の重荷と一緒に他人の重荷をも背負いなさい、と言っているのでしょうか。でも、自分のことだけでも精一杯なのに、他人の重荷や苦しみで、背負ってあげたくても、なかなか背負うことなんて容易にできることではない。私たちはそう思いがちです。目前に迫る期末テスト、成績のこと、家族のこと、学費のこと、税金、減っていく貯金、などなど、自分のことで精一杯です。それなのにどうやって、他人の重荷まで気にかけることができるのか。そのようにはお感じになりませんか。それが、普通の思いなのかもしれません。

すでに互いの重荷は

負っているのでは

でも実は、すでに皆さんは、このようなパウロの勧めをすでにおやりになっているのです。今日は、とても美しいコーラスを聞かせていただきました。そこで、大変失礼なのですが、このコーラスをお聞かせいただいた同志社教職員合唱団の皆さんを例に考えてみましょう。

讃美歌では、今日のコーラスのように高音部から低音部まで三つ、あるいは四つの異なった旋律で歌い、一つの美しい音楽を作っています。これを和声と言うそうですが、この時の人（私たち）の脳の働きを大脳生理学的に考えてみましょう。このとき、それぞれのパートを担当される方々は、実は耳や目のほか、体で感じる直感を総動員して、別のパートの歌声・リズムを感じ取りながら、ご自分のパートの旋律のバランスをとって歌おうとされているのです。歌う方々の脳のなかでは、そのとき猛烈な早さで脳神経細胞とその末端、つまりニューロンのネットワークが互いに連結し合い、合唱団全体と別の方々のパートの音とリズムの情報を受信します。すると今度は、脳は合唱団全体の歌声と各パートの歌声と、自分自身の歌唱力とのマッチングを計算し、自分自身が歌うべき歌詞・旋律・リズムをやはり猛烈な早さで声帯や口へ指令として送り、歌を歌う動作を行わせるのです。そしてこの動作は、讃美歌を歌っている間続けられる、ということです。

少し話がややこしくなりましたが、実は、素敵なコーラスを歌うには、このような脳の生理的な働きだけではどうにもならないことがあるのだそうです。それは、お歌いになる方々お一人お一人が、美しいハーモニーを奏でたい、讃美歌の詩を表現したいという心と、他の多くの方々の歌声を味わう感性が重要だということです。そして、その心や感性と味わいがうまく働くとき、歌う方の脳では、どんどんアドレナリンが分泌されて、興奮と陶酔は最高潮に達しているのです。そのときの達成感は何とも言えないものがあるでしょう。

それでは、その心や感性はどこからくるのでしょうか。ルターは「賛美歌を歌うことで二度祈ることができる」と語っています。私はそこに、私たちが神からいただいた恵みがあると感じてしまいます。素敵な音楽を奏でたい。ここで、教会でしか出会えないあの人たちと、仲良しのこの人たちと、共に声を合わせて歌うことができる。美しいハーモニー。誰も遠慮することなく朗々と神を賛美する。それは、楽しみであり、興奮であり、時には涙かもしれません。さらに、それは常に喜びに違いありません。

重荷を担い合うことの

実感

一人ひとりが、互いに相手の担う仕事・重荷を感じ、理解し、自分の成すべき仕事をマッチングさせながら一緒に大きな働きを達成していく。すでに、私たちの心のなかには、それを成し遂げるための信仰や、良き働きを味わいたいという深い思いがある。いや、それは主の望みであり、主からの賜物なのでしょう。

もし重荷について問うならば、コリントの信徒への手紙一12章25・26節を読むべきかもしれません。「各部分が互いに配慮し合っています。一つの部分が苦しめば、すべての部分が共に苦しみ、一つの部分が尊ばれば、すべての部分が共に喜ぶのです」とあります。「互いに重荷を担い合う」ことはまた、「互いに喜びを分かち合う」こと、そのように主はパウロを通して示されている。そして、その背景には必ず愛がある。そのようなときも、避けることのできない重荷も、決して苦痛となる重荷ではなくなってくるものなのです。

またそこには主が寄り添い、そっとその重荷を共に担ってくださっている。今日共に歌いました讃美歌、532番の繰り返しの部分では、「ひるとなく、よるとなく、主の愛にまもられて、いつか主にむすばれつ、世にはなきまじわりよ」と歌いました。このように、主はどんな時も、共にいてくださる。私たちは知らない間に、主イエス・キリストと結ばれ、守られているのです。

2013年1月15日 今出川火曜チャペル・アワー「音楽礼拝奨励」記録